慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	BECOME言語という類型にみられる日本語とロシア語の共通性
Sub Title	A typological comparison of Japanese and Russian as BECOME-languages
Author	朝妻, 恵里子(Asazuma, Eriko) Golovina, Ksenia
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2016
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・ 文化・ コミュニケーション (Language, culture and communication). No.47 (2016.) ,p.1- 14
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20160331-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

BECOME言語という類型にみられる
日本語とロシア語の共通性

朝妻恵里子　ゴロウィナ・クセーニヤ

はじめに

本稿の目的は，言語学におけるBE言語とHAVE言語という類型論的な枠組みを用いて，BE言語である日本語とロシア語の表現を比較対照することにある。日本語とロシア語がそれぞれBE言語であることは指摘されてきたが，両言語が類型論的な近似性という観点から比較分析されたことはない。系統的には何の共通性もない二つの言語であるが，類型論的にみると多くの類似点が浮き彫りになる。池上（1981）によるBECOME言語[1)]という類型を採用し，BE言語である両言語が同時にBECOME言語でもあることを明らかにし，より広い視点から日本語とロシア語の表現体系を比較し，共通点を見いだす。

1. BE言語とHAVE言語

BE言語とHAVE言語という類型論的な区別は，20世紀の後半におけるイサチェンコ（Issatchenko 1974）やバンヴェニスト（1983 [1960]）の研究にさかのぼる。これによれば，一般に言語には「～には…がある」という「存在」を表す表現と，「～は…を持っている」という「所有」を表す表現があり，この二つの表現方法がもととなってさまざまな状況を表す用法に拡張している。「存在」表現の形式が「所有」表現にまで及んでいる言語はBE言語，逆に「所有」表現の形式が「存在」表現に用いられている言語はHAVE言語

1）池上（1981）では，「する」言語と「なる」言語と名づけられているが，Ikegami（1991）がDO-language，BECOME-languageと呼んでいることから，本稿では「DO言語」と「BECOME言語」に統一する。

と類型化される。次の二つの文は BE 言語か HAVE 言語かの類型を示す例である。

1a）わたしには 2 人の子どもがいる。（池上 2006: 161）
b）I have two children.
2a）この部屋には窓が二つあります。
b）This room has two windows.

日本語では 1a）のように「所有」の表現を用いるべきところを「存在」で，英語では 2b）のように「存在」の表現を用いるべきところを「所有」で表現しており，このことから日本語は BE 言語，英語は HAVE 言語と区別されている。言語変化の一般的な流れは，もともと存在動詞で表していたことを所有動詞で表現するようになるという方向性にあり，その逆はないと言われている（バンヴェニスト 1981: 184）。

日本語が典型的な BE 言語であるという指摘は，国広（1974），池上（1981），Hinds（1986），本多（2005）らによってなされ，典型的な HAVE 言語である英語と比較されてきた。これらの日本語・英語の類型論的な比較研究では，BE 言語と HAVE 言語の区別がさらに拡張され，日本語は状況中心の言語であり，自動詞表現を好むのに対し，英語は人間中心の言語であり，他動詞表現を好むことが指摘されている。

3a）物音が聞こえた。
b）I heard a noise.
4a）富士山が見える。
b）I see Mt. Fuji.
5a）給料が出た。
b）I have got my salary.

以上の例文は，日本語では人間主語を明示せず，状況を中心とした自動詞構文になっているのに対し，英語では人間を主体とし，目的語を伴う他動詞を用いていることを示している。こうした特徴から，池上（1981）はより端的に日本語を BECOME 言語，英語を DO 言語と名づけた。これに関しては後述する。

2. BE 言語のロシア語

一方，ロシア語はイサチェンコによって典型的な be 言語とされている。先の例文に従うと，ロシア語では次のように「存在」を表す есть で表現される。

1c）У меня <u>есть</u> двое детей. (*Я имею двое детей.)

2c）В этой комнате <u>есть</u> два окна. (*Эта комната имеет два окна.)

ロシア語では「持つ」にあたる動詞 иметь は普通用いられず[2)]，「空間」を表す前置詞 у と，「存在」を表す述語 есть を用いて「所有」を表現する。この「前置詞 у + 生格」の前置詞句は歴史的にはもともと「場所」を表し，「所有」の意味は二次的に派生した。現代ロシア語ではこのタイプの文には「場所」と「所有」の意味が共存しているとされ（Жихарева 1966: 232），ロシア語はまさしく BE 言語といえる。

近年においても，イサチェンコの見解を発展させる形で多くの論文が発表されている。たとえば，BE 言語と HAVE 言語の類型的な区分を支持し，両言語における「所有」の表現の非対称性（Милованова 2013）を論じた研究，ロシア語のシンタクスにおける быть 動詞の役割を考察した研究（Мишланов 2002），「所有」，「場所」，「存在」を表す表現の相互の対応性をフランス語と比較した研究（Давлетшина 2008），ロシア語の無人称動詞 есть の表現をマケドニア語と比較した研究（Иванова 2013），ロシア語とほかのスラヴ語における「所有」表現の比較をし，ロシア語では BE 言語と HAVE 言語の性質が共存していることを指摘した研究（Danylenko 2009），あるいは，従来のこうした研究で指摘されているほど，BE 言語と HAVE 言語に極端に異なる点があるわけではないという主張（Циммерлинг 2000）などがある。

2）歴史的にもスラヴ祖語には「持つ」にあたる動詞は存在せず，иметь はギリシャ語からの翻訳借用語である（Issatchenko 1974）。そのため，иметь は иметь дело с…「…と関係を持つ」や иметь честь「光栄である」といった限られた慣用表現で使用されることが多い。

また，イサチェンコの指摘にもあるように，BE 言語における「持つ」という動詞には他動詞性が薄く，自動詞のように用いられることが多い。たしかに，日本語「持つ」もロシア語 иметь も目的語をとらずに用いられることが多い。日本語の最近の口語的表現では「持たない生活」，「持っている人」といった使われかたが頻繁にみられる。

3. BECOME 言語

BECOME 言語と DO 言語についての池上（1981）の見解をより詳しくみてみる。これによると，外界の出来事を表現する際，言語による表現は「状態」と「変化」の大きく二つに分類することができ，この二つのうちいずれかの深層構造を基礎としてさまざまな言語表現が生成されるとしている。「変化」を基盤とする言語においては，変化を加える主体と変化を加えられる客体といった個体に話し手の意識が集まるのに対し，「状態」を基盤とする言語においては，話し手は個体の変化よりも変化の過程を全体的に把握する傾向にある。池上は，「変化」と「状態」のどちらが言語表現の基礎になっているかによって，言語を類型論的に二分することができるとし，これらをより一般的に DO 言語と BECOME 言語と名づけた。

6a）水が氷に<u>なる</u>。
b）Water <u>turns into</u> ice.
7a）春に<u>なった</u>。
b）Spring has <u>arrived</u>.
8a）彼は大人に<u>なった</u>。
b）He has <u>come</u> of age.
9a）まずいことに<u>なった</u>。
b）Something bad <u>happened</u>.

英語では，「変化」を表す際，自動詞 become よりも，go や come といった移動動詞，あるいは get や turn などが用いられるのが普通である。6b）では「水」が「氷」という個体へ移動したかのように，7b）では「春」が移動してきて「到着」したかのように，8b）では，「大人の歳」に「到着」したかのように，9b）では「まずいこと」が「ふりかかる」という動詞によって移動したように表現される。日本語ではこうした個体が移動するようなニュアンスはなく，自動詞「なる」を用いて一つの過程として出来事を全体的に捉えている。つまり，英語は変化する個体に注目する言語であり，日本語は変化全体に注目する言語である。

DO 言語の特徴は，変化する個体への注目のほかに，他動詞性が強いこと，文構造にお

いて人間中心であることが挙げられ，HAVE 言語の特徴とおおむね重なる。BECOME 言語の特徴は，推移の全体的把握という先に挙げた特徴のほか，自動詞性が強いこと，状況中心であることが挙げられ，こちらも BE 言語の特徴と一致する点が多い。池上も「おそらく，＜する＞的な言語（DO-language）であれば，それは同時に ‘HAVE-language’ であり，＜なる＞的な言語（BECOME-language）であれば同時に ‘BE-language’ でもあることが推定される。」（池上 1981: 283）と述べている。

4. 日本語とロシア語の共通性

(1) ロシア語の BECOME 言語的な性質

ロシア語が BE 言語であることは間違いないとしても，同時に BECOME 言語であるかどうかはこれまで議論されていない。先の例文をロシア語で表してみる。

6c）Вода становится льдом.
7c）Настала весна.
8c）Он стал взрослым.
9c）Вышла неприятность.

ロシア語においても，日本語と同様，移動動詞を用いることはあまりなく，become にあたる становиться – стать を中心として，наставать – настать（接頭辞 на + стать），выходить – выйти「生じる」といった動詞によって表される傾向にある。日本語のように「なる」という動詞一つに依拠しているわけではないが，ロシア語にも BECOME 言語的な要素が強く感じられる。ちなみに，日本語の「なる」はそもそも「～にあり」の縮約形（「～に + ある」→「なる」）として成立し，ロシア語の стать も 16 世紀以降，口語から発展し，コピュラとして用いられていた（Руднев 2014: 59–94）。また 9c）の выйти も，一般には移動動詞に分類されるが，アプレシャン（Апресян 2009: 442）の指摘にあるように，たとえば 9c）に従うと，“Стала существовать неприятность”「いやなことが存在するようになった」という「存在」の意味であり，この用法には「移動」の意味はない。ここにも「変化」でなく「状態」として動作を捉える BECOME 言語の特徴が表れている。

日本語の「なる」は「変化」を表すだけでなく，直接的な言い回しを避け，あたかも自

然に，当人の意志とは離れたところで事態が進行したかのようなニュアンスを与える用法や，またそこから派生して補助動詞としての敬語用法まである。以下でロシア語と対比する。なお，参考として DO 言語の英語の例も挙げる。

10a）先生がお亡くなりになった。
b）Преподавателя не стало.
c）Our teacher passed away.
11a）私たち，結婚することになった。
b）Мы поженимся. / Мы станем мужем и женой.
c）We are getting married.
12a）今日，行けなくなった。
b）У меня не получается сегодня прийти.
c）I cannot come today.
13a）全部で 10000 円になります。
b）Итого получается 10000 йен. / Всего будет 10000 йен.[3)]
c）It is 10000 yen in total.
14a）総理がおいでになりました。
b）Приехал премьер-министр.
c）Prime minister has arrived.

ロシア語でもやはり，стать や получаться – получиться，あるいは再帰動詞を用いて，日本語と同じように，断定調を避けた曖昧なニュアンスが表されている。10b）は日本語と同様に直接的な умереть「死ぬ」の使用を避ける表現になっている。「亡くなる」にあたる не стало も主体との対応を明示しない－ o 語尾を取っている。このとき，主語の преподаватель「先生」は主格でなく，生格標示される。存在否定の生格という文法的

3）ルドゥニョフ（Руднев 2014: 71）によると，18 世紀の стать（「なる」）には物の値段を表す意味用法があった。（“И по указу великих государей сделал себе крылья слюдные, а стали те крылья в 18 рублей из государевой казны.” (Желябужский И. А. Записки Желябужского с 1682 по 2 июля 1709. СПб., 1840.）「偉大な君主の勅令によって雲母の羽をつくり，その羽は君主の資金からの支払いで 18 ルーブルだった。」）。よって，現在は使われていないが，13b）の例はかつては「なる」的な意味の стать で表すことが可能だったのであり，ますます日本語の「なる」の用法と近いことがわかる。

規則にのっとったものだが，主格がないという格標示によっても直接的指示を避ける効果が生み出されている。11b）の поженитьсяは再帰動詞であり，再帰動詞の接辞 -ся は自動詞化の意味を付与する。したがって поженитьсяは他動詞 поженить「結婚させる」から派生した他動性を持たない動詞であり，自然に起こったかのような「～するようになる」という意味を持つ。12b）の получатьсяは получать「～を得る」から派生した再帰動詞で，口語で「うまくいく」「～するようになる」の意味で近年多用されている[4)]。注目すべきはこの получатьсяが主語を主格で標示しない無人称動詞である点である。получатьсяは意味上の主語を「前置詞 у＋生格（主体）」（「（主体）のまわりでは～」の意味）の形式で示すことからも，主体の存在よりも外的な状況を重視することが裏づけられる（4.（3）参照）。また，13b）では，未来形の быть が用いられることもあるが，ここでは時間的な未来の意味は含まれていない。これは，現在形ではなく未来形を用いることにより，表現の直接性を避ける意味機能であり，日本語の「なる」のニュアンスに近いと考える。

一方，典型的な DO 言語である英語においては，pass，get，come といった移動を表す動詞が用いられたり，13c）では未来形でなく現在形が現れたりと，いずれも直接的な言い回しといえる。とりわけ 12c）では，「わたしは行けない」と主格標示し，明確に意思表示する英語と，主格標示もなく，外的状況によって行くことが不可能になったと形式化する日本語，ロシア語との差が際立っている。

14a）にみられるように，日本語の「なる」は直接的な指示を避け，動作主の主体性を薄める効果から，敬語表現にも転じている。ロシア語の стать や英語の become にこうした用法はみられないが，ロシア語では become 的な意味を持つ動詞が謙譲の意味で使われている（4.（4）にて後述）。

(2) ザリズニャクとレヴォンチナらの研究

直接的表現を避けるロシア語のこうした傾向に関しては，ヴェジビツカ（Wierzbicka

4）池上（1981: 113）によれば，英語のreceiveは本来「迎え入れる」という「主語A←目的語B」の消極的なニュアンスだったが，そこから「歓迎する」という「主語A→目的語B」の積極的性を含んだ意味に発展した。人間中心型のDO言語では「人A→B」の意味を導く傾向がある。しかしBECOME言語のロシア語では，получить「受け取る」から再帰動詞のполучиться「来る」を後発させたことからも「A←B」の意味が好まれることがわかる。

1992）が指摘している。また，ザリズニャクとレヴォンチナ（Зализняк and Левонтина2005）は，この言語的性質をロシア人の「民族的特徴」とまで述べ，ヴェジビツカの見解を発展させ，動詞分析を行っている。これによると，ロシア語には前述のполучаться をはじめとする多くの動詞（собираться「～するつもりである」，постараться「頑張る」，удаться「成功する」，успеть「～する余裕がある」，сложиться「～ができあがる」，довестись「～することがある」，посчастливиться「うまくいく」，повезти「運よく～する」，угораздить「～する気になる」，умудриться「うまいこと～する」）が，その行為が動作主の意志の及ばない範囲で行われることを意図し，あたかも自然のなりゆきのように行為が遂行されるニュアンスを与える。こうした表現をロシア人は非常に好むという。上記の動詞に関して，より詳細に考察してみる。

15）Я <u>постараюсь</u> купить билеты.　チケットを買ってみる。

16）Мне не <u>удалось</u> купить билеты.　チケットを（頑張ったが）買えなかった。

17）Я не <u>успел</u> купить билеты.　チケットを買うのが間に合わなかった。
→チケットを首尾よく買えなかった。

18）У меня не <u>вышло</u> купить билеты.　チケットを買えないということとなってしまった。

19）У меня не <u>сложилось</u> купить билеты.　チケットを買えないということになってしまった。

15）は постараться「頑張る」という動詞を用いているが，あえて「頑張る」と述べるほどの必要がない状況においても用いられるのが特筆すべき点である。16）の удаться「成功する」も近年，使用頻度の高い動詞である。「買えなかった」ことの非は自分にないことを示唆している。この動詞も主格を用いず，意味上の主語を与格で標示する無人称動詞である。直訳すれば「（主体）には～することがうまくできなかった」という婉曲表現である。17）の не успеть は「～する間がない」という時間的な意味を持つが，口語では「時間」の意味に限定されず，「うまくいかない」の意味で用いられることが多い。18），19）も「買えなかった」のは自然のなりゆきであるかのような言い回しである。これらの例から明らかなように，伝えられる事実は，「買えなかった」という極めて単純明快な内容であるにも関わらず，ロシア語では動作主の主体性を弱化し，状況に重みを置くのである。

ザリズニャクとレヴォンチナは，これらの動詞がロシア語に固有の曖昧表現を可能にす

るものであり，これらをほかの言語に翻訳することはできないと述べている（Зализняк and Левонтина 2005: 325）[5]。しかし，これらの多くは日本語の「なる」に翻訳可能である。また，主体の弱化，状況中心といった現象はロシア語にのみ見うけられるのではなく，日本語をはじめとする BECOME 言語の類型的特徴といえる。日本語では「なる」という非常に汎用度の高い動詞一つがさまざまな意味用法に拡張しているのに対し，ロシア語では стать のほか多数の動詞によって，動作主体の存在を弱化させた「なる」的なニュアンスを表現するという違いがあるが，基本的には両言語とも BECOME 言語の特徴を共有している。ザリズニャクとレヴォンチナの論文は，ロシア語の個別言語研究に重点を置き，類型論的視点に欠けている。

(3) 格標示による主体関与度の強弱化

ザリズニャクとレヴォンチナはごく簡単に触れているだけだが，格標示によって主体の行為への関与度を明示できる点は強調すべき点である。同じ BECOME 言語でも，日本語は主体の省略が頻繁であり，主体の格下げ度合いは形式化されない。これに対して，ロシア語は厳密な格標示を伴う言語であり，主体の関与度の強弱を段階化することが可能である。

20）Я смог купить билет. ［主格］わたしはチケットを買えた。

21）Мне удалось купить билет. ［与格］わたしはチケットを買えた。

22）У меня получилось купить билет. ［生格］わたしはチケットを買えた。

23）Со мной случилась неприятная ситуация. ［造格］嫌なことがわたしに起こった。

ロシア語では主体を示す際に，主格＞与格＞生格＞造格という格階層（Зализняк and Левонтина 2005: 325）があることがわかる。与格は単独で意味上の主語の役割を果たすが，生格と造格は必ず前置詞とともに用いて意味上の主語となりうる[6]。そのため，生格，

5）ザリズニャクとレヴォンチナは，動作主の行為性を表す強度を次のように順序立てた。

1）смог, 2）удалось, 3）получилось, 4）вышло, 5）сложилось, 6）случилось

動作主の行為性が最も強いсмочь「できる」と動作主の行為性が最も低いслучиться「起こる」という動詞が両極に配置されており，3），4），5）の動詞を「翻訳不能」としているが，これらこそが日本語の「なる」に一致すると考えられる。

6）前置詞つきで用いられる生格と造格のうち，生格のほうが格階層が高いのは，生格は動詞との結びつきが造格よりも強いためである。ロマン・ヤコブソン（Jakobson 1936: 46）の指摘にあるよ

造格標示の主体は主格や与格標示よりも一層関与度が弱まる。この明確な標示によって，話し手は主体の関与度を意識的に明示することができる。

日本語では，こうした格によって主体の関与度を明らかにする機能はない。むしろ主体をゼロ化することがたびたびあるため，主体という個体がつねに出来事のなかに埋没し，曖昧で，一層漠然としている。日本語とロシア語では格標示の点でこうした大きな違いがあるが，このことは両言語ともに BECOME 言語としての文法体系が整っていることを示している。たとえば，DO 言語の英語は，主体の省略はほぼ不可能であり，多様な格標示も伴わないため，つねに主体が主格で標示される。このため，文法形式的に主体の存在を弱化させることで，直示的表現をさけるニュアンスを表出することは受動態文などに限られる。この点において日本語とロシア語は，主体の存在のゼロ化や強弱の段階化といった文法操作が可能な言語であり，そのために多様な曖昧表現を作りだすことができるのである。

(4) BECOME 動詞の謙譲表現

BECOME 言語という枠組みで日本語とロシア語を比較すると，明らかになることはまだある。その一つは，話し手の主張を控えめにする，ある種の謙譲語にあたる働きがある点である。何らかの依頼を断ったり，物事について遠慮がちに説明したり，自分の成功を報告したりするとき，BECOME 動詞（「なる」; получиться、удаться など）を使うと，相手に威圧的な印象を与えることなく，物やわらかな表現になる。

24a）新聞社に勤めることになりました。

b）У меня получилось поступить на работу в газету.

25a）力になれなくて，申し訳ありません。

b）Я прощу прощения, что мне не удалось вам помочь.

24）の日本語・ロシア語の双方の文に含まれるニュアンスは単なる報告ではない。24b）のロシア語では，過去形が使われていることからも明らかなように，努力の末に職を得ることができたということを含意している。これは，この文に応答する際には「おめでとう」「よくやった」といった返事が自然であることからも裏づけられる。日本語でも同じように，

うに，造格は文構造の中心的役割を果たさない周縁的な格である。

「新聞社に勤めます。」では単なる今後の進路を述べる場合である。「なる」を用いることで「運よくこういう結果になった」という含みをもたせられる。25）でも，не смог помочь「手伝うことができなかった」ではなく，BECOME 動詞の удаться を用いることで「頑張ったが状況によりできなかった」という相手に詫びるニュアンスを含んでいる。

これもまた日本語の「なる」との大きな共通点であり，日本語では「なる」動詞は尊敬語にまで拡張されたプロセスを理解するための一つの鍵となる。

（5）挿入語としての BECOME 動詞

ロシア語における BECOME 動詞の一部（выйти，получиться，сложиться）は，挿入語としても用いられることは興味深い。たとえば，ロシア語では Так вышло ～や Так сложилось ～などの挿入語が頻繁に用いられる。これらは日本語の「～ということになった」という表現に一致し，伝えられる内容に対し枠組みをし，その内容を状況として焦点化する役割を果たす[7)]。これは日本語にもロシア語にも見うけられる現象であり，状況優先の BECOME 言語の共通点として捉えることができる。

26a）チケットを買えないということになってしまった。

b）Так получилось (вышло, сложилось, случилось), что я не купил билеты.

英語にも It turned out that ～という表現は存在するが，使用範囲は限られる。一方，ロシア語と日本語ではこういった表現が非常に好まれ，これらを用いることで動作主ではなく状況を強調するのである。

また，BECOME 動詞 стать を用いた Стало быть ～という挿入語もある。

27）Стало быть, ты купил билеты со скидкой?　割引でチケットを買ったということ？

ルドゥニョフ（Руднев 2014: 61–62）は，現代ロシア語で多用される BECOME 動詞

7）物理学者のルイ・ド・ブロイは，フランス語に関して考察した論文において，挿入語が多い言語では，思考を深く表現することができるが，その一方で正確さに欠ける（言い換えれば，曖昧である）と述べている（Де Бройль 1962: 326–333）。日本語もロシア語もこれに当てはまると考えられる。

стать は，17 世紀以降盛んに用いられた「стать＋быть」という構造に由来し，挿入語 стало быть ～「～ということになる」もその名残りであると推測している。前述したように，日本語の「なる」も「にあり」から派生してできたものであり，「стать＋быть」から стать が独立したことと共通点が多い。

5. 結論

本稿では BE 言語としての日本語とロシア語の「所有」表現の類似性にはじまり，より広い視点から BECOME 言語としての両言語の表現方法の共通性をみてきた。DO 言語では，行為の主体が中心に据えられ，その主体の視点から出来事が捉えられるのに対し，BECOME 言語では，主体自身が出来事のなかに存在し，自然のなりゆきであるかのように状況が描写される。こうした BECOME 言語の特徴を日本語とロシア語の表現の事例からより明白に浮かび上がらせることができた。

自動詞の優勢，状況重視，主体の弱化，謙譲表現，挿入語による状況の焦点化といった特徴は，単なる諸特徴の列挙ではなく，これらすべての特徴は体系的に関連し合っている。本稿では言及しなかったが，たとえばロシア語の無人称述語（Видно Фудзи.「富士山がみえる。」）や，感情を表す表現で「自発」の意味の再帰動詞が多用されるケース（Я удивился этой новости.「わたしはこのニュースに驚いた。」）も BECOME 言語の特徴として結びつくだろう。BECOME 言語という枠組みを用いることで，ある一定の言語グループにみられる体系的，普遍的傾向を捉えることができ，その言語に特徴的なさまざま現象を分析する際の手がかりにもなる。

本稿では日本語とロシア語の文法構造の厳密な比較という方法はとらず，両言語における好まれる表現の仕方，言い回しに着目した。これは，文法構造の比較対照では話し手，書き手の選好的傾向は見過ごされてしまうためである。言語が使用される場と，それと結びつく言語主体による表現の選択傾向にこそ，その言語の本質的特徴があらわれる。

また，人間中心 vs. 状況中心といった対立は，人間中心のキリスト教観と，神と自然とが一体化した東洋的な自然観にしばしば結びつけられる。ロシアはキリスト教圏の国であるが，それ以前の多神教の名残りから，自然との強いつながりのある文化であると言われている。本稿はこうした見解の裏づけの一端を示すこともできた[8)]。

8）本稿は日本学術振興会科学研究費補助金「一貫教育における複言語能力養成のための人材教育・教材開発の研究」（2015 年～2019 年、基盤研究（A）、課題番号：15H01886、研究代表者：境

参考文献

池上嘉彦『「する」と「なる」の言語学』大修館書店，1981 年。

池上嘉彦『英語の感覚・日本語の感覚<ことばの意味>のしくみ』NHK ブックス，2006 年。

国広哲也「日英語表現体系の比較」，『言語生活』270，1974 年，46–52 頁。

バンヴェニスト，エミール『一般言語学の諸問題』河村正夫ほか訳，みすず書房，1983 年。

本多啓『アフォーダンスの認知意味論』東京大学出版会，2005 年。

Danylenko, Andrii. The East Slavic ‘HAVE’ : between the *be*- and *have*-patterning? Available at: https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/pdf_seminar/20090619Danylenko.pdf (Jan. 2016).

Hinds, John *Situation vs. Person Focus*, くろしお出版，1986 年。

Ikegami, Yoshihiko “ ‘Do-Language’ and ‘Become-Language’ : Two Contrasting Types of Linguistics Representation,” *The Empire of Signs: Semiotic Essays on Japanese Culture*, ed. by Ikegami, Yoshihiko, J. Benjamins Pub. Co., 1991, pp. 285–326.

Issatchenko, Alexander V. “On ‘Have’ and ‘Be’ Languages (A Typological Sketch), *Slavic Forum: Essays in Linguistics and Literature,* Michael S. Flier (ed.), The Hague/Paris: Mouton, 1974, pp. 43–77.

Jakobson, Roman “Beitrag zur allgemeinen Kasuslehre (Gesamtbedeutungen der russischen Kasus),” *Selected Writings II*, The Hague: Mouton, 1971, pp. 23–71.

Wierzbicka, Anna. *Semantics, Culture, and Cognition: Universal Human Concepts in Culture-Specific Configurations*, Oxford University Press, 1992.

Апресян Ю.Д. Исследования по семантике и лексикографии. Том 1: Парадигматика. М.: Языки славянских культур, 2009. – 568 с.

Давлетшина С.М. Соотношение посессивности, экзистенциональности и локативности. Вестник Челябинского государственного университета, Серия “Филология. Искусствоведение”. Выпуск 28, № 37 (138), 2008. – с. 36–40.

Де Бройль, Луи. Французский язык как средство выражения научной мысли // По тропам науки. (Перевод с французского С.Ф. Шушурина). И.В. Кузнецов (общ. ред.). М.: Издательство иностранной литературы, 1962. – с. 326–333.

Жихарева Н.Д. К вопросу о выражении принадлежности в истории русского языка // Ученые записки Курского педагогического института, вып. 25. Краткие очерки по русскому языку № 2, 1966. – с. 227–233.

Иванова Е. Ю. Поле экзистенциальности в русском и македонском языках. Morfosintaksi~ki studii 2, 2013. – с. 145–170.

Зализняк А.А., Левонтина И.Б. Отражение “национального характера” в лексике русского языка // Ключевые идеи русской языковой картины мира. А.А. Зализняк, И.Б. Левонтина, А.Д. Шмелев. М.: Языки славянской культуры, 2005. – 544 с.

Милованова М.В. Ассиметричность посессивных ситуаций в ESSE- и HABEO-языках // Человек. Язык. Культура: сборник научных статей, посвященных 60–летнему юбилею

一三）と、「ロシア語教育における基礎語彙コロケーションの研究」（2015 年～2018 年、基盤研究（C）、課題番号：15K02759、研究代表者：秋山真一）による成果の一部である。

проф. В.И. Карасика, в 2–х ч., В.В. Колосов и др. (отв. соред.). Киев: Издательский дом Д. Бураго, 2013. – с. 57–63.

Мишланов В.А. Глагол «быть» в русском синтаксисе // Изменяющийся языковой мир. Пермь, 2002. – с. 211–213.

Руднев Д.В. Связочные глаголы в русском языке XVII–XIX веков: диссертация на соискание ученой степени доктора филологических наук. Санкт-Петербургский государственный университет, 2014.

Циммерлинг А.В. Обладать и быть рядом // Логический анализ языка. Языки пространств. Н.Д. Арутюнова, И.Б. Левонтина (отв. ред.). М.: Языки славянской культуры, 2000. – с. 179–188.